

2022. 6. 19 (日) 使徒2:14~21

2:14 ペテロは十一人とともに立って、声を張り上げ、人々に語りかけた。「ユダヤの皆さん、ならびにエルサレムに住むすべての皆さん、あなたがたにこのことを知っていただきたい。私のことばに耳を傾けていただきたい。

2:15 今は朝の九時ですから、この人たちは、あなたがたが思っているように酔っているわけではありません。

2:16 これは、預言者ヨエルによって語られたことです。

2:17 『神は言われる。終わりの日に、わたしはすべての人にわたしの霊を注ぐ。あなたがたの息子や娘は預言し、青年は幻を見、老人は夢を見る。

2:18 その日わたしは、わたしのしもべにも、はしためにも、わたしの霊を注ぐ。すると彼らは預言する。

2:19 また、わたしは上は天に不思議を、下は地にしるしを現れさせる。それは血と火と立ち上る煙。

2:20 主の大いなる輝かしい日が来る前に、太陽は闇に、月は血に変わる。

2:21 しかし、主の御名を呼び求める者はみな救われる。』

<説教>

今からおよそ2000年前、五旬節（ユダヤ人の三大祭りの一つ。ペンテコステ）の日にエルサレム（おそらくはその神殿）に集まっていたイエスの使徒たち弟子たちの上に、イエスの約束の通りに聖霊が天から降って一人ひとりの上にとどまりました。すると皆が聖霊に満たされて、聖霊が語らせてくださるままに他国のいろいろなことばで話し始めました(2:4)。エルサレムから見ても片田舎のガリラヤ地方出身の無学な普通の人たちだったイエスの使徒たちがエルサレムの東西南北、当時の〈天下のあらゆる国の人々〉の話すことばで神の大きなみわざを語ったので、それを見、聞いた人々はみな〈呆気にとられ〉〈驚き、不思議に思い〉当惑して「いったい、これはどうしたことか」と言い合いました。そして中には「彼らは新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言って、嘲る者たちもいたのでした。

自分たちに理解できない、信じられない不思議なことを見聞きすると人々は「あの人はちょっとおかしい」「何かに取りつかれているみたいだ」とか言うことがあります。私たちキリスト者がやはり〈神の大きなみわざ〉について、つまり「神が私たち罪人をあわれんでくださり愛してくださり、私たちがその罪の故に神の刑罰を受けて永遠の滅びに至ることがないように、逆に永遠のいのちを得るようにと御子イエスを人としてこの世に送ってくださった。その罪無きイエスが私たちの罪のために十字架で死なれ、三日目に復活してくださった。それ故そのイエスを救い主と信じる者の罪を神は赦してくださり、罪無きイエスの義を与え、死んでも生きる永遠のいのちを与えてくださる。」そんな神の大きな恵みを人に話しても、聞いた人にはそれこそ「外国語」を聞いたかのように不思議に思われ理解してくれない、挙げ句の果てには「それはおかしい。信じられない」とか「キリスト教に凝り固まり過ぎだ」とか「もう少し寛容に、広い考えを」とか言われたり思われたりもするのです。もっとも私たち自身が以前はそういう者、イエスを信じていない者、信

じられない者でした。ですからこの世にあって私たちがイエスを自分の罪からの救い主、キリストと信じ救われること、そして更に「イエス・キリストの証人」としてイエスを証しし、イエスに従って生きて行くことはそもそも自分の願いや力によることではありません。それは神の善き願いによること、神の善き御意思（みこころ）によること、神の善きご計画によることであり、罪人に救い主イエス・キリストを呼び求めさせ、信じさせる神の力、殊に聖霊なる神の力によることなのです。ペンテコステの日にイエスの使徒たち、弟子たちの上に起こったことはそのことであって、新しいぶどう酒の力などでは断じてない、と使徒ペテロはこの「初代教会最初の説教」で神のみこころ解き明かしたのです。その聖霊を豊かに注いでくださったのは私たちの罪のために十字架で死なれ、よみがえられ、天に昇られ神の右に上げられた主イエス・キリストだ、とペテロはイエス・キリストを指し示しました(33)。この〈主の御名を呼び求める者はみな救われる〉(21)、それが神のご計画、約束であり、それ故旧約聖書で既に記されていたことであり今実現していることだとペテロは語りました。また、このイエスを自分の救い主、キリストと信じ従う〈わたしのしもべ、はしため〉に〈わたしの霊〉すなわち聖霊を神が注がれる、〈すると彼らは預言する〉つまり神のみことばを語り、神の御意思を語り、イエスの証しをすること、それも神のご計画、約束であり、それ故旧約聖書で既に記されており、今実現していることだとペテロは解き明かしたのです。

さて、そんなペテロの説教、証し語りかけをまず聞きべきは〈ユダヤの皆さん、ならびにエルサレムに住むすべての皆さん〉(14)、すなわち〈イスラエルの皆さん〉(22)でした。なぜなら、〈神のおおきなみわざ〉をまずその身で受け、その歴史で経験し、聞かされ教えられて来たのがイスラエルの民だったからです。(旧約)聖書を与えられ、〈預言者ヨエルによって〉神からその大きな素晴らしい善きみこころ、約束を与えられていたのはイスラエルの民でした。ですから「まず先に神の素晴らしい善き約束のみことばがあり、それがみことばどおりに実現した」ということがイスラエルの民の間で確認されなければなりませんでした。そのとき確かに神の〈しもべ(男奴隷)〉〈はしため(女奴隷)〉であるイエスの使徒たち、弟子たち(イスラエルの民)に神の霊、聖霊が注がれ、彼ら彼女らは〈預言〉した(神のおおきなみわざを語った)のですから。他のイスラエルの民もペテロの語りかけを聞いてそれに従うべきでした。

「あなたがたにこのことを知っていただきたい。私のことばに耳を傾けていただきたい。」とペテロは〈声を張り上げ〉てイスラエルの民に語りかけました(14)。〈このこと〉とは、〈預言者ヨエルによって語られた〉神の約束、みこころが実現しているということです。それは旧約の時代が終わって新約の時代になった、ということでもあります。〈終わりの日〉(17)、〈その日〉(18)の「日」は「日々(複数)」ですから、それは何年何月何日という特定の日というより(そんな特定の日—まさにこのときの〈五旬節の日〉はそんな日でしたが—も含めた)日々、時代、世代ということになるでしょう。それはもちろん、一度この地上に人となって来られ、十字架で死んで復活し天に昇られたイエスがまたおいでになる再臨の日、神の最終審判と〈主の御名を呼び求める者〉の救いの完成が一日また一日と近づいている「日々」でもあります。だからペテロはまず自分たちと同じユダヤ人たちに向かって、まず自分たちと同じように、男も女も、若きも老いも〈主の御名を呼び求め〉て、つまりイエスを神の子、キリストと信じて救われるように言うのです。またそう

して主の〈しもべ〉〈はしため〉として、約束の〈賜物として聖霊を受け〉(38)るように、そして男も女も、若きも老いも神の「預言者」として〈幻〉や〈夢〉を見るようにと〈声を張り上げ、人々に語りかけた〉のです。〈幻〉も〈夢〉もこの場合はそれによって神がご自身のみこころを人に知らせる手段のことですから〈幻〉や〈夢〉は人の好き勝手な願い望みのことではありません。〈預言する〉〈幻を見る〉〈夢を見る〉とはどれも神のみこころを知ること、更にはその神のみこころを語り、その神のみこころに従うということに他ならないのです。それはただ聖霊の力によるのであり、〈神の右に上げられたイエスが、約束された聖霊を御父から受けて、…注いでくださ〉る(33)のです。

19-20 節に記されている事柄は、イエスがマタイ 24 章などでお教えになったような、イエスの再臨と世の終わり時のしるしとそっくりです。「終わりの日には困難な時代が来ることを、承知していなさい。」(Ⅱテモテ 3:1)と使徒パウロも言っています。五旬節の日に人々がしたのと同じような大いなる「誤解と「嘲り」がイエスの証人に向けられるのも今も同じです。しかし同時に五旬節の日に確認された神の大きなみわざ、神の大きな約束—聖霊の注ぎとその結果—もまた今日も(主の再臨の日まで)有効です。〈主の御名を呼び求める者は〉、すなわち聖霊によってイエスを主と心で信じ口で告白する者は、たとえ人々から誤解されようが嘲られようが、必ず〈みな救われる〉のです。それが今日も生きておられる主イエスの聖霊による〈神の大きなみわざ〉なのです。

旧約の時代には特定の「神の人」が聖霊の格別な注ぎを受けました。その一人だったモーセは「主の民がみな、預言者となり、主が彼らの上にご自分の霊を与えられるとよいのに。」と言いました(民数記 11:29)

〈主の御名を呼び求める者はみな救われる〉という神のご計画、約束をまず聞かされ、聖霊の注ぎを約束されて来たのはですから、まず神のご計画、約束が先にあり、それが実現した

、イエス・キリストの力普通のことではありません。明らかに世の多くの人の流れに、その考えや行動に逆らっていくことになります。ですからそれはやはり闘いです。

でもそんな私たちの今日、今の時代にイエスを信じる信仰と、イエスに聞き従う信仰の生活は神が永遠の昔から